



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第21号 2014.07.14

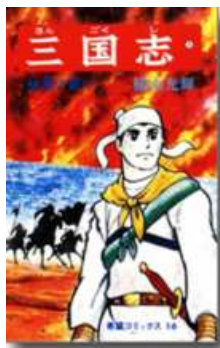
“本”の出会いが、いつの頃だったのか、正直なところさっぱり記憶にない。ただ、本がなければ、今、私がここにいないことだけは確実である。

「そんな大げさな…」と思われるかもしれないが、事実である。本がなければ、私は歴史に興味を抱かなかっただろう。私の日本史の授業を受けている何人かの皆さんはお気づきだろうが、はっきり言って私は“歴史オタク”である。今は、もっとステキな呼び方がされていて“歴女”などとも言われているが、まあ言葉を飾ったところでオタクはオタクである。つまるところ趣味が高じて、現在の仕事に就いているわけである。

では、「よほど素晴らしい本と出会ったのだろう。」と思われるかもしれない。ただ、私としては素晴らしい出会いだったのだが、残念ながら、万人にそうだと言ってもらえるかは分からない。何しろ、小学校の頃出会ったそれは、マンガだったからだ。その名もズバリ『三国志』。横山光輝による全60巻にも及ぶ超大作である。中国が魏・呉・蜀の3つに分裂していた三国時代の、蜀の劉備を中心とした英雄たちの物語である。何度読んでも、関羽や張飛といった豪傑たちの強さ、軍師・諸葛亮の素晴らしい采配にワクワクさせられる。ちなみに、私は諸葛亮の大ファンである。蜀軍は敵勢力と比べて圧倒的に兵力が少ない。そこで、諸葛亮がさまざまな奇策を思いつくのだが、赤壁の戦い（映画「レッドクリフ」の元ネタと言った方が分かりやすいだろうか）などは本当に面白い。何度も繰り返し読んだ結果、これらの本はボロボロに痛んでいるが、現在も実家の本棚に並んでいる。

その後も、その魅力にとりつかれた私は、吉川英治による『三国志』を手にすることとなる。活字になっても、面白い。ただ、マンガと小説の違いはあれど、同じ題材のはずなのに、書き手によって違いがあることに気付く。その後、高校生になる頃までには、何種類もの『三国志』を読んだ。基本的にどれも大筋は「蜀は善、魏は悪」、「奮闘むなく蜀は滅びる」というものだったが、中には魏の視点から書かれたものや、もし蜀が天下を統一できていたら、といったものもあった。もちろん、私の中での一番は、吉川英治によるものである。登場人物は多いが、教科書に載っている歴史上の人物と違って不思議と覚えらるものである。ワクワクすること、間違いなし。ぜひ、一度手に取ってみて欲しいと思う。正直、『三国志』に出会っていなければ、歴史に興味を持つこともなかっただろう。

そして、おそらく、この頃から単なる“歴史好き”ではなく、学問としての歴史に興味を持ち始めたのだと思う。『日本書紀』や『古事記』などは、もちろん原文ではなく現代語訳されたものを読んだのだが、ヤマタノオロチや因幡の白ウサギ、天の岩戸伝説など、読み物としても大変面白い。日本の神様は、結構人間くさかったりする。「そんな教科書に載ってる堅苦しい本なんて」と思わず、読んでみてはどうだろうか。意外と、とっつきやすいかもしれない。食わず嫌い、ならぬ読まず嫌いなんて、実にもったいない話である。



私の進む路を示してくれた「本」との出会い

さて、こんな話ばかり書いていると、歴史物ばかり読んでいるのかと思われそうだが、そうでもない。我が家の書斎に並んでいる本は、かなり娯楽系のものも多い。その中で、好きな作家をあげてみると、女性作家でいえば有川浩、男性作家でいえば田中芳樹だろうか。



有川浩は、『三匹のおっさん』や『阪急電車』など映像化されているので、そちらで知っている人が多いかもしれない。『三匹のおっさん』では、剣道の達人キョ・柔道家シゲ・頭脳派ノリの3人が、

ご近所で起こる諸悪を退治し、問題を解決していく様子が、とても痛快で面白い。読んでいて、とてもスッパリする。ストレスがたまった時などに読むといいのかも。『阪急電車』はその名の通り、片道僅か15分程度の阪急電車今津線で、乗客の人生が少しずつ交差していく話。実際白いドレスで電車に乗り込んでくる人がいたら、かなり驚くだろうが、乗客それぞれにドラマがあって面白い。『図書館戦争』シリーズもそうだが、有川浩の本を読んでいると、年甲斐もなくちょっと胸がきゅんとする。

一方で、田中芳樹の本は、高校時代によく読んでいた。未だ完結していない作品も多いので、勧めるのが難しいのだが、『銀河英雄伝説』が一番面白いと思う。タイトルを見て分かると思うが、SF小説である。銀河帝国と自由惑星同盟という2つの勢力にいる戦争の天才、ラインハルトとヤン。ラインハルトは帝国の皇帝となり独裁政権を築くが、一方のヤンは民主主義国家の中であって、一軍人としてこれに対抗していく。果たして勝つのはどちらだ、という『三国志』に近いストーリーで、それぞれさまざまな戦略・戦術を駆使して戦っていく。なので、単なる戦争物と思われがちだが、物語を貫くテーマの1つは「民主主義と独裁専制政治の戦い」である。民主主義、専制政治、それぞれのメリット・デメリットについても考えさせられる本である。とはいえ、そんなことを始終考えながら読んでいても、面白くはない。単純にストーリーが面白い。登場人物が魅力的。それがおすすめする一番の理由である。ただし、手に取って読み進めると、最初の方は延々と世界観の説明が続くので、ここで断念する人が多い。だが、その部分はすっ飛ばして読んでも全く問題ないので、ご安心を。



東野圭吾や宮部みゆきなど好きな作家はまだまだいるが何とか紙面を埋めることができた。とりあえず、言いたいのは、本の世界に浸るのは楽しいということ。本を読めば擬似的にでもいろいろな体験ができ、感動できる。外国へも、過去へも、未来へだって、はたまた空想の世界へだって思うままに行ることができる。自分自身で体験することももちろん大事だが、一生の中で、果たしてどれだけの体験を重ねることができるのか。そう思うと、せっかく手の届く所に本があるのだから、何か1冊手に取ってみたい。ひょとしたら、人生を決める本に出会えるかも。ちなみに、夏休み、私は百田尚樹の『永遠のゼロ』を読んで、過去の世界を堪能しようと思っている。

(社会科 三上 みずほ)